
【二次創作SS】さよならメモリーズ【supercell】

すけとも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【二次創作SS】さよならメモリーズ【supercell】

【Nコード】

N4905K

【作者名】

すけとも

【あらすじ】

言葉じゃうまく言えない想いを
キミに打ち明けるとしたらなんて
伝えよう？

私と圭介クンと一緒に過ごしたあの日に別れを
卒業式、あの満開の桜並木で
さよならメモリーズ

(前書き)

お久しぶりです。すけともです。
今回も二次創作SSです。

2月10日に発売されたCD、「Supercell」さよならメモ
リーズ」の歌詞をイメージして書きました。

注 このSSは筆者がSupercellさんの曲を視聴して、
自分なりの解釈で創作したものであり、Supercellさんの
作品の意図を表す内容ではありません。
また、Supercellさんの著作権を侵害する目的で創作した
ものでもありません。

春一番という現象がある。

季節が冬から春に変わる時にやってくる暖かくて強い南風の事らしいのだが、その風が吹き終えた後にはすぐ北寄りの冷たい風が吹くそうさ。そうして大体一週間ほど寒い日と暖かい日を繰り返しながら春はゆっくりと訪れてくると

その話を最初に聞いた時、春が来るってことはそれだけ大変なことなのかと嘆息混じりに思ったものだ。

よく「 のところにも春が来た」と言うが昔の人は本当によくうまい言葉を思いつくものだ。私のような引つ込み思案の人間にはさぞこの言葉に重みが増すことだろう。

……私には来るのだろうか。

三年前のあの日、満開の桜並木の木々が一斉に揺れた。春一番はとうに過ぎていたがあの日の風もまた、それと同じように強くて暖かい風だった。

私の新しい制服のスカートを大きくなびかせたその風はキミの短い前髪までもかき上げ、二人の間を一気に吹き去っていった。まだこの頃名前も知らなかったキミがゆっくりと口を開く。

新入生の方ですか？

私とキミはあれからどれくらい変わったのだろうか？

「小川つてさ、なんで文芸部に入ったの？」

高校に入学してから半年が過ぎた秋の夕暮れのことだった。文化祭の出し物である創作文芸の発表に追われていた私と同じ文芸部員である土屋圭介はこの日、美術部の人に手伝ってもらった予定の表

紙の絵のテーマを決めている最中であつた。

この日の文芸部には私と土屋クンしかいなかった。他の部員は部長である三年の先輩と二年の先輩の女子が二人いただけだつた。三人とも作品づくりに没頭しているらしく、今は部室ではなく資料集めに図書館の方で缶詰になつていた。

「私は……絵本とか好きだつたし」

「へえ。……つてことはあれだ。『ぐりとぐら』みたいなあんな感じのものを文化祭の出し物に出すつもりなんだ？」

「そ、そんなちゃんとした絵本みたいにはならないよ！ 私は絵とかへただし文章もちゃんと子供に伝わるかどうかかわかんないし……」
「なんだか照れくさくなつて私は必死にそう口にした。」

「読むのは慣れてるけど……書くとなると難しいよね」

土屋クンは私を見ながらパイプ椅子をギシギシいわせて後ろへのけ反つた。

「んー。どうだろうなあ。絵本かあ……なんかそれも面白そうだな」

「つ、土屋クンは？ 土屋クンは何を書こうと思つてるの？」

「俺？ 俺はそうだなあ……」

天井を見上げながら土屋クンは考えを巡らせているようだつた。

「強いて言つなら……SFとか？」

「SF？」

「なんだよ、しょうがねえじゃねえか。それしか読んだ事ないんだし」

前のめりになつて机に突つ伏すと、土屋クンは黙つて窓の外を見始めた。

「たとえばテレパシーとかで人の気持ちがわかつてしまう主人公がいるんだ。そいつには好きな人がいて、その好きな人には自分じゃない別の人が好きなんだつてことがわかつちやうんだよ。そんな感じでストーリー作つていけば、ウケも悪くなさそうだよ。何もガチガチのスペースオペラを書こうつてわけじゃないんだ俺は」

「へえ……なんかすごい」

本当に感心してしまった。私には物語を作ろうって思ってもすぐにぱつと頭の中でイメージを浮かび上がらせる事が出来ない。土屋クンは私に聞かれてすぐにストーリーを思いついたようで、しばらく窓の方を向いたままさらに何か面白い話を作れないか思案しているようだだった。

「もうひとつ思いついた。主人公には好きな女の子がいる。しかし、実はその好きな女の子っていうのは夜になると東京を襲うゴジラのような大怪獣になってしまっんだ！」

「え？」

思わず表紙案から目を離して土屋クンを見つめてしまった。

「実はその女の子はまだ主人公と会う前に宇宙からやってきた宇宙人に体に乗っ取られてしまっていたんだ。そこで偶然その彼女の秘密を知ってしまった主人公は悩む。まさか彼女が今、日本を騒がせている大怪獣だったなんて……ってね。彼女はもちろん自分が夜な夜な街を破壊しているなんて事をしらない。その夜も彼女は怪獣オワゴンとなって街を襲う。そして」

「……そしてどうなるの？」

「ごくりと息をのんで私は次の言葉を待った。

「……ていうか一体なんだ？ オワゴンって。私の事なのだろうか。」

「秘密だ。……よし、決めた！ このプロットを軸に俺は文化祭の冊子に入れることにするぜ」

土屋クンは嬉々として今思いついたこのヘンテコなストーリーを、どうやら本気で書くつもりのようなだった。ノートに今思いついたプロットののようなものをメモに取ると、カバンをひつつかんでパイプ椅子から立ち上がった。

「帰ろうぜ。小川」

「桜子。こんなところにいたのか」

一年生の頃の文芸部の冊子をばらばらとめくっていると、後ろからそんな声がした。

「圭介くん」

「何見てんだ……ってそれ一年の時の奴か」

圭介くんは私の持っているものに目が止まると、恥ずかしそうに笑いだした。

「あの時、もう少し俺に文章力があれば傑作SFラブストーリーだったのになあ」

「まだ言ってるの？」

私はくすくすと笑いながら圭介くんが書いたストーリーを眺めた。あの時、気になっていたストーリーの続きはこうだった。

その夜、街を襲うオガワゴンの足元で主人公は叫ぶのだ。

『もうやめてくれ！　いつもの可愛く笑っている君がこんなことをするなんて……』

しかし主人公の声もむなしく、彼女は街の破壊をやめなかった。

愛する彼女の為にその身一つでぶつかる主人公。そんな時、主人公の耳にある声が聞こえた。

『彼女を助きたいか。ならば力を貸そう』

その声は彼女の体に乗っ取っているゴジラのような宇宙人を追いかけて地球までやってきたウルトラマンのような宇宙人だった。主人公はウルトラマンのような宇宙人の力を借りて彼女と戦う。主人公から繰り出される数々のパンチ、キック、モンゴリアンチョップなどの攻撃に怪獣オガワゴンはなす術なくボロボロになってしまう。その姿を見て、主人公は思ったのだ。

『これ以上彼女を攻撃できない』

『バカなことを！　あの怪物を退治しなければ街の人たちは死んでしまうぞ！』

心の中で争う主人公とウルトラマンのような宇宙人。そうした攻撃の迷いが生じてしまったせいで主人公は怪獣オガワゴンの反撃ビ

ームをくらってしまふ。

絶体絶命のピンチ。

その時、主人公は最後の手段に出た

「やっぱ抱きしめてキスで解決とか安直だったよなあ」

圭介くんはまだこの作品のラストに納得が言っていないらしく、文化祭が終わった後もしばらくああすればよかった、こうすればよかったと部室で愚痴を垂れていたのだった。

「でも、私にはすごく面白かった」

「いや、あれよりも二年生の時に書いた『ドーナツがタイムマシンの話の方がずっと出来には満足してる』」

「ねえ、圭介くん……」

圭介くんの話を遮って私は窓の外をみた。

窓の向こうはもう透き通るような青空で、校庭では私たちと同じように卒業証書をもたらした学生たちが並んで写真を撮ったりしてはしゃぎまわっていた。

「先輩たちもこんな光景を見ながら、さよならをしていったんだね」

土屋くんは手に持っていた丸い筒を机の上に置いた。

「そうだな。オガワゴンを書いていた時には想像すらしてなかったけど、お前ともうこの部室で作品の話をするともなくなっちゃうんだな」

私がためらっていた二の句を圭介くんはさらりと言い放ってしまった。

「お前、覚えてる？ 最初文芸部に入った時の事」

圭介くんはパイプ椅子を広げると、どかっとなそこに腰をおろしてつぶやいた。

「お前が文芸部の前で入部届けを持って立ってたんだ。そこに俺が通りがかってさ」

もちろん覚えている。

忘れるわけがなかった。

だって私はそれよりも前に圭介クンの事、気になっていたんだから。

「文芸部に入るの？」

緊張して凝り固まっていたせいで、その声をかけられた時は身体がびくつと硬直してしまった。おそろおそろ振りかえると、そこには入学式のあの日、高校の前の桜並木の道で声をかけられたあの人があった。

確か、名前は土屋圭介。

中学の時は陸上部の全国大会で県の代表として選ばれた逸材なのだとかクラス中で評判だった人だった。

そんな人がなぜ文化部の部室棟なんかにいるのだろう。

そしてなんで私に声をかけてきたのだろう。

「そ、そうですね……」

「あ、そうなんだ。あのさ。俺もここに入りたいんだ。一人って結構緊張するし、よかつたら一緒に入らない？」

……なんと？

私は目をくりくりさせて土屋クンを見た。

「あ、あの。ここは陸上部の部室ではないんです……けど」

正直よく知らない相手と喋るのはあんまり得意ではない。誰でもそうなのかもしれないが、私は根が内気というかなんと……人見知りのとにかく激しい女なのだった。

ましてや異性ならば余計にである。

さらにそれが入学式の時に話しかけられたあの人だと思つて思い出して、思わず顔から火を噴き出そうになった。

あの時、私にあんな恥ずかしい思いをさせたくせに、どうしてこの人そんな普通に話しかけてくれるのだろう。

「陸上部……？ ああ。君もその話を聞いたクチか」

土屋クンはめんどくさそうな顔をしながら頭をかいた。

「ホント困るよなあ。同じ中学から上がってきた奴が言いふらしていたんだろうけど、俺高校では陸上部入る気ないんだよね」

「……え？」

「ったく。なんで話がこんな知れ渡ってるんだ。他にスポーツの成績を残した奴いないのかよ……」

「ど、どうして」

声が少しだけ上ずってしまった。私ははっとして口を塞いだだが、土屋クンの耳には届いてしまったらしい。

「……へ？」

きょんとした様子でこちらを見返した。

「い、いや。どうして……足早いんでしょ？ 得意なんだし……」

自分が何を言っているのかわからない。これでは「文芸部に入るな、陸上部に行け」と言っているみたいじゃないか。別にそんな事が言いたいわけではないのだ。

私は得意なものなんて一つも持っていない。文芸部に入ろうと思っただのは他の人気の文化部よりも煩わしい人間関係がなさそうだし、小学生の時に絵本や児童文学が好きだったからという単純な動機でしかなかった。中学では手芸部に入っていたのだが、不器用過ぎて正直目も当てられないものばかりを量産していた。

だから私には不思議だったのだ。自分に誇れるものがそこにあるのに。皆が評価してくれるものを持ち合わせている人間がなぜこんなところへ

「好きじゃないから」

土屋クンはあっけらかんとした口調で答えた。

「正しくは他に好きなものがあるから、かな。君が言ってるように足はそんなに遅くはないよ。早くもないけどね。皆誤解しすぎだから」

照れくさそうに笑いながら土屋クンは「文芸部」と書かれているプレートを指差した。

「もともと陸上は友達に誘われて入ったんだ。でも俺がやりたいものはこれ」

土屋くんは私に目を落として入部届けを見せた。

「小さい時からSF小説が好きだったんだ。家に親父がたくさん持っていたからなんだけどね。そういうのをたくさん読んでいるうちに、自分もなんか書いてみたいなって思ってたし、他に面白いジャンルの物語とか教えてくれる人いっぱい居るような感じじゃん？」

変わった人だと思った。

そして土屋くんは戸惑う私の背中を押して一緒に文芸部の部室のドアをゆっくりと開けたのだった。

「あのお前のお前の顔ったらなかったぜ。今じゃ考えられないわ」

お腹を押さえながら笑う圭介くんを見て私は頬を膨らました。

「私もあの時、あんなに圭介くんがデリカシーのない人間だなんて思わなかったし」

「へえ。俺がいつデリカシーのない事言っただけ？」

「ひどい！前に私の事、『あんまり可愛くないけど指が細いよね』とか言っただじゃない！」

私の言葉にあーっと声をあげて圭介くんは私を指差した。

「それは正しくないな。正確には『あんまり可愛らしい顔じゃないけど、指が細くて綺麗だから羨ましいな』だ」

「どっちでも一緒よ。そういう圭介くんだつて別にかっこよくないじゃない。入学したての時は『陸上部の期待の星』とか持ち上げられて女子とかの噂になってたけど、文芸部に入ってからそんな評判、ぶっつりだしさ」

「へ？俺が？マジでそんな噂されてたの？……ああ！ちっくしよう！陸上部入っておけば良かったかもしれねえ」

「バカね。こんな地味な部に入っちゃったせいで、お株が急落しちゃって」

「……中身は一緒なのになあ」
小さな文芸部室に二人の柔らかな笑い声がこだました。
ここにいと、圭介クンと過ごした三年間の事がたくさん思い出される。

クラスは三年間一緒になった事なんかなくて、二人で話す事も文芸部室以外では一切なかった。

普段、廊下ですれ違う時も互いが互いのクラスメイトと一緒に歩いてたせいだろうか？

それとも二人で話す姿を他の人に見られなくなかったから？

この場所が、まるで二人の密会場所のようになってしまっていた。それが余計に私の圭介クンに対する想いを深めていったように思う。

……けれど、私は何も言えずにいた。

言えるわけがなかった。

そもそも一体なんて打ち明ければいいのだろうか。とても言葉じやうまく言えない想いを一体どんな風に正確に相手に届けられればいいのだろうか。

わからないままとうとうこの日を迎えてしまった。

卒業式。

「さてと……そろそろ帰ろうっか」

がたんと音がして窓の景色から目を離すと、パイプ椅子から圭介クンが立ち上がっている姿が目に入った。

「そういえばお前、今日見た？ 学校の目の前の坂の下の桜並木。あれ、すごいことになってたぞ」

私はこくりと首を傾けて、小さくほほ笑んだ。

「知ってる。すごい満開だった」

文芸部を出て、廊下を二人並んで歩く。既に他の卒業生たちは帰ってしまったことに気付いた私は、ずいぶん長く二人で文芸部

に残っていたのだと知った。

それでも話した事と言えば思い出話だけだ。
きゅつと心が痛むのを感じた。

二人で校門を出たところで圭介くんはくるりと学校の方に向き直った。

「もう来る事がなくなっちまうな」

その声はかなり残念そうだった。私は何も言えず、圭介くんの横顔をちらりと眺めるだけだった。

「……桜子は短大に行くんだろ？ こっからすぐの」

「うん。そういう圭介くんは東京の大学でしょ」

「まあ、そんなに遠い場所でもないけどな。文学部。これからもっともっと面白い話を量産していくからな。SF作家、土屋圭介の名が全国に知れ渡る日も近いぜ」

「どうかな。コメディ作家、土屋圭介かもしれないよ」

「む。そんな俺のことなんかよりも、お前こそちゃんと勉強して保育士の資格取れよな」

「私よりも圭介くんだよ。作家になる人なんて本当に大変なんじゃない？」

「俺はブレないからな」

ドキツとした。そう口にした圭介くんの目がとても真剣だったからだ。

ただまっすぐ、じっと前を見つめていた。

「すごいな……やっぱり敵わないよ」

私は圭介くんを見てため息をつきながら風でなびく自分の髪を押さえた。

「圭介くんはずっとそうだよな。何をするにも迷いが無い。それって誰にも出来る事じゃないと思う。私はなんていうか……いつも自分に自信がないし、何をするにも決めるにも流されるままで……時々そんな自分が嫌になっちゃう。そうやって私はどどん年を重ねていっちゃうのかなって。それでいいのかなって」

「でもお前は保育士になるんだろ？　それがお前の決めた道なんじゃないのか？」

「それも単純な動機で。結局私は絵本や児童文学を読むのが好きなだけなの。いつか圭介くんが『どんな絵本があるんだ？』って言うてくれた時にたくさん読み聞かせてあげたでしょ？」

「俺はガキか」

苦笑いする圭介くんには私は首を横に振った。

「要はその延長線上なの。将来のなりたい自分、なんてことあんまり深く考えてない。きつとちよつとの失敗や挫折で、『ああ、自分の進む道、間違えちゃったのかな』って思っちゃいそうな……弱くて、とてももろい動機。きつと他に得意な事があつたら簡単にそっちに乗り換えちゃいそう……」

沈黙が生まれた。

圭介くんは何も言わずに、私の方を黙って見つめていた。その空気がたまらなくなって私はわざとらしくあははつと声をあげて笑った。

「ごめんね、卒業式なのに。なんだか言いたい事もうまくまとまっていな。圭介くんはすごいと思う。何を話すにも自分の気持ちを正確に伝えられるじゃない。ホント私は駄目で……」

涙がこらえきれなかった。

涙と一緒に三年間、二人で過ごした時間や景色などがいつぱいに詰め込まれた脳内メモリーが一気に溢れ出してくる。

ようやくわかったのだ。

私が見つめているのはこの先に待っている未来なんかじゃない。

今日今まで自分の中にため込んできた、あの楽しかった三年間なのだ。

卒業式なのに私は何も卒業できていなかった。

私自身が卒業していなくても時は流れる。

置いてけぼりを食らった私にやってくるのはこれからの将来の不安、そして圭介くんと過ごしたあの文芸部の時間がなくなるとい

恐怖感だけだった。

いやだ。

終わりたくないよ。

卒業したくない。

大人になんかなりたくないんだ。

「どうして……」

ぼろぼろと涙をこぼす私をみて圭介くんが囁いた。

「どうして泣くんだよ……」

「わかんない……わかんないよ……。私はずっと過去を見てる。毎日、すごく楽しかった。とても楽しかったの。それが……その思い出が……急に」

圭介くんが私の肩に手を置いた。

「私、思い出ばかり見てる。ふらふらしてるのもきつとそのせい。これから進んでいく道の事を思うと、なんだか落ち着かなくてすごく不安定な気がする。それは私が前をきちんと向いていないから。まだ学校で……あの文芸部で……楽しかった毎日を過ごしていたいから」

「それはちよつと違う」

圭介くんの声には私はボロボロの顔をあげた。

「お前はいつも俺を誤解してる。別に迷ったり悩んだりするのは当たり前だ。俺だって毎日悩んだり、迷ったりしてる。文学部に入っただきだつて『本当にこれでいいのだろうか』って思った」

「……ホントに？」

「当たり前だろ。大体、文芸部に入るときだつて相当迷ったんだぜ。最終的に同じ答えだったただけだ」

目じりを拭いながら圭介くんの顔を見る。なぜかその顔は赤らんでいた。

「なんていうか……お前の前ではカツコつけたくて……本当は色々考えてるんだぜ、俺も。本当になれるかどうかなんてわからないし、なれない確率の方がずっと高いかもしれない。でもな、お前にそう

言ったからには何が何でもやらなくちゃって……そんな風に自分に言い聞かせてるだけなんだ。弱いんだぜ、俺も」

その時、学校のチャイムが鳴り響いた。正午を告げる合図だった。私たちは並んでゆっくりと坂道を下って行った。

「俺も過去に振りまわされてるくらいはあるな。実際、お前と一緒に三年間は楽しかった。すごく楽しかった。でも、望んでなくても俺たちは卒業しちまった。もうあの場所に行く事はない。俺たちは別々の道を行くんだし」

再び、涙が溢れそうになった。しかし、今度はぐつとそれをこらえて私は圭介クンの言葉にじつと耳を傾けていた。

「お前が保育士の道を挫折してしまったとしても俺は別にお前を責めないし、お前も自分を責めなくていいよ。でも、だからといって一度自分の選んだその選択が間違っていたとか思わない方がいい。それは今までの自分を否定した事になるから。たとえどんなに弱くて頼りない動機だったとしても、それはお前の心そのものを否定することになるから」

話はそこで中断した。

坂道を下りきった私たちが目の前に広がる光景に思わず目を奪われてしまったからだだった。

「す、ご……い」

満開の桜並木が煽られる強風によつてもものすごい花びらの洪水となっていた。

「おい、桜子。お前の頭、桜だらけだぞ」

圭介くんは私の頭を指差しながら笑いだした。そういう自分こそ頭に大量に乗っかっているではないか。

私も圭介くんも互いに笑いあいながら桜並木の中をゆっくりと歩きまわる。

「圭介くん」

「ん？」

「ありがとう」

「……さっきの話か？」

「それもあるけど、今までもことも全部。私、圭介クンと出会えてよかったと思ってる」

「……お前な、よくそんな恥ずかしいこと言えるな」

「な、なんで？ 別に普通じゃない！」

桃色の桜が二人の身体にぱらぱらとこぼれ落ちてくる。

私は三年前のあの日のことを、今なら言ってもいいような気がしていた。

「ねえ、圭介クン。実はね、文芸部室で会う前に私たちこの場所で会っていたんだよ」

「え？」

私はあの時の事をゆっくりとなぞるように話した。

新入生の方ですか？

そう呼びかけられて私は振り返った。

そこには同じ高校の制服に身を包んだ男の人が立っていた。

正直、話しかけられて驚いた。今までまともに男の人に声をかけられたことなどなかったのだ。

「は、はい」

消え入りそうなか細い声で私は返事をした。明らかに彼の視線は私に向いていたからだ。

しかし私の後ろから別の人の声が出た時、それは私にかけられた声ではない事を知った。

「あ、はい。そうですけど」

かぁーっと顔が熱くなる。私の前を歩いていた男子がぐるりと振りかえって私の真横を通り過ぎ、声をかけた男の方へと向かう。

「あ……」

一方の声をかけた方である人物は、私の事に気付いたのだろう。すぐく申し訳なさそうな顔をしながら、

「う、ごめん」

と口にした。私はもうたまらなく恥ずかしくなって、真っ赤に火照った顔を隠すように桜並木を駆け抜けていった。

バカ。バカ。バカ。

なんて自意識過剰なんだ。内気で暗くて地味な私が、高校生になつたからって急に男子から声をかけられるはずないじゃない。

恥ずかしくつてもどかしくつて死にたくなるほどだった。猛スピードで坂道を駆け上がり、校門をくぐつたところで私は息をせえぜえ言わせながら、心を鎮めることにした。

そのまままっすぐ玄関口からトイレへと向かって自分の顔を眺める。入学式しよっぱなからひどい顔で髪の毛ぐしゃぐしゃである。強風のせいもあるが、なによりもひどいのはメンタル面からやってきた自らの眼力である。元々が垂れ目なせいもあるが、いつにもまして自信のなさそうな弱々しい負のオーラが漂っている。

その後もずっと憂鬱なまま入学式を終えた。最初のクラスの顔合わせの時に必死になって彼の顔を探し、同じクラスではなかったことを知った時、本当にどれほど安堵した事か。

「……あの時の話、今まで一切しなかったのは本当に恥ずかしくつたんだからね」

ちよっぴり照れながら、私は地面に落ちた桜の花びらを蹴った。無数もの花びらがまた宙へと浮いた。

その花びら達が再び地面に落ちた。音もなく静かにそっと。

「覚えてるよ」

「え？」

「覚えていたんだ。実はちゃんと俺も。同時にさっき言いそびれていたことがある」

圭介クンの顔が目の前に落ちてきた桜で一瞬見えなくなる。

「俺が文芸部に入ったのは、実はあの時の桜子のこともあったんだ」

「それって……どういう……」

圭介クンの顔が現れた。

まるで、あの時の　三年前と同じようなシチュエーションがそこにはあった。

「俺が声をかけたのは、キミなんだよ桜子。俺はあの時、キミと話がしたかった」

強い風が吹いた。私のスカートをたなびかせて、桜の洪水が一気に二人の周りを取り囲む。

「文芸部で出会った時、俺は最初にその事を謝ろうと思った。でもすぐには言葉に出なかつたんだ。そしたら急に、お前　キミが陸上部の時の事を言いだしたんだ。俺はてっきりキミがああの時の事を忘れてしまっているとかかり思ってた。それならいっそ今から……イチから作り上げていくことが出来るかもしれないって」

ああ。

なんてことだろう。

私はぎゅっと胸が締め付けられるようになりながら、圭介クンの顔から目を逸らした。

今はとてもじゃないが、まっすぐに圭介クンの顔を見つめられない。

「一目会った時から思ってたんだ。キミと　桜子と一緒に三年間過ごせたらなって。正直、クラスが違う時は残念だった。でも、俺が文芸部に入部届けを出しに行こうとした時、このチャンスを逃す手はないって。……あはは。ほらな？　俺も案外人の事言えた義理じゃないんだ。入部理由には下心もあつたってわけ」

私もだ。

私も一目見たとき、この人の好きになりそうって。

なんでかな。

わかんないよ。

「……ご、ごめんね」

私は震える声で、静かにそう言った。

再び押し殺したような沈黙。

風が静かになり、辺り一帯から物音が消えた。

「……そっか」

圭介クンはくるっと背を向けた。

「そうだよな。……あはは。わかっていただけ、きつついな。なんていうかでも、俺もようやく肩の荷が降りたって感じ？ しっかしまさかお前もあの時のこと覚えていたとはな……。……本当にびっくりしたよ」

そのまま歩き出そうとした圭介クンに私は全速力で駆け寄る。

今ならきつと私は圭介クンの足より早いはずだ。

そう実感した。

私は圭介クンの腕をがっしりとつかむと、驚いたような顔で圭介クンは振り返った。

「ご、ごめん。そ……そうじゃないの。な……なんでかな？ うまく言えないんだけど」

声が余計震える。寒くもないのに、全身ががくがくと痙攣しているような気がする。

足がふらつく。世界がぐるぐると回っている気がする。浮遊感が体全体を支配して、今自分が座っているのか立っているのかすら一瞬忘れてしまいそうになる。

「あ、あのね。わ、私……その……キミとなんていうか……」
頑張れ。頑張れ私。

これがかきつと本当に最後なのだ。これでお別れなのだ。

「い、今のまま……このまま、さよなら……したくないんだ……それは……つまり」

二人のあの楽しかった三年間が一気にフラッシュバックされる。

最初に二人で帰ったあの日、私はわざとらしく遠回りをしたりした。「間違えた」だなんていってみたけど、今思うとなんてわざとらしいと苦笑いしてしまう。

「嫌だから……圭介クンと……もう、友達のままじゃ嫌なの。ずっ

と、ずっと言おうと思ってたんだ。……な、なんかごめんね……あたし、ホント口下手で……でね」

どれもこれも大切な思い出。

でも思い出しがみつくような明日が来るなんて

そんなのは嫌だ。

だから、さよなら

「私……も。キ、ミの事……ずっと……ずっと……ずっと
さよなら。」

「前から……好きでした」

ああ。やっと言えた。

(了)

(後書き)

前回は本当に拙い文章で、内容も数々のご指摘をいただき大変勉強となりました。

で、今回はその反省を踏まえて！と言いたいのですが……実は今回は前作以上にやっつけですw
書いた時間3時間です。申し訳ございません。

さらに2作目のCDが発売していることを実はつい先日まで知らなかったという失態……

締め切り間近の公募作を一旦置いて、急いで書き上げたものなのでもしかしたらかなり誤字があるかも……随時見直して訂正していきます。

最後のメモリーズがホントは「私の思い出たち」にルビをふって「メモリーズ」だったんですが、出来ませんでした……orz 申し訳ございません。

SupercellさんのCDをパソコンで流しながら、読んでいただければ、光栄極まりないでございます。3/24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4905k/>

【二次創作SS】さよならメモリーズ【supercell】

2010年10月8日15時22分発行